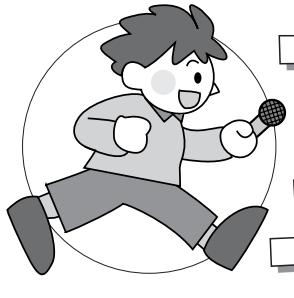


INTERVIEW

きしゃ
子どもネットワーカー記者
ユニセフスタッフにインタビュー



アフガニスタンの 子どもたちは今...

昨年9月から急に注目されるようになったアフガニスタン。空爆、難民キャンプの子どもたち、やっと平和が訪れつつある人びとの生活...毎日、テレビや新聞のニュースがどんどん変わるアフガニスタンのようすを伝えています。

アフガニスタンではこうして報道されるずっと前からきびしい状況がつづいていました。23年にわたる内戦、3年にわたるかんばつ。十分すぎる苦しみを受けているのに、世界はそれをすっかり忘れてしまったかのように無関心でした。

いま、アフガニスタンではようやく平和がうまれつつあります。3月23日からの新学期には、178万人の子どもたちが3000の学校にもどりました。しかし、あれはてた国をもういちどつくりなおし、子どもたちのくらしを“ふつう”的な状態にもどすためには、まだ気が遠くなるほどの道のりが待っています。

今回、6人のユニセフ子どもネットワーカー記者が、アフガニスタンに深くかわって活動してきた2人のユニセフスタッフにインタビューをしました。こたえてくださったのは、昨年12月までユニセフ・アフガニスタン事務所ではたらいていた勝間靖さんとアフガニスタンのとなりの国、タジキスタンのユニセフの事務所ではたらく塙尾雪絵さん。おふたりはどんな話をしてくださったのでしょうか。

アフガニスタンってどんな国?

Q アフガニスタンには戦争と破壊のイメージがありましたが、先日インターネットでカブール美術館の展示物の写真を見て、壮大で壮麗な文化財がたくさんありました。

A:(勝間さん) アフガニスタンの周辺は東方の文化と西方の文化が交流する交差点みたいなところだったんです。仏教がギリシャの彫刻や哲学と出会って、ガンドーラ仏像という最初の仏像がつくられました。世界中から仏教の教えを学びに人が集まっています。

(塙尾さん) タジキスタンにも世界で一番大きな涅槃像があります。シルクロードはいろいろな文化が交差するところですから、知られざる発見がたくさんあるんですよ。

Q 「空爆前のアフガニスタンは治安がよかった」という話を聞いたのですが、本当ですか?

A:(勝間さん) もともとアフガニスタンは治安が悪かったのですが、タリバン*が政権を担うようになってから、いきすぎなほど規律をきびしくし、それを全国的に広げたので、治安がよくなり人びとは喜びました。でも、生活がよくならない。病院もないし井戸もない。それに、「女性は動いてはいけない、教育も受けなければいけない」など禁止することが多くて、人びとの期待はどんどんうすれていったと思います。

*タリバン: イスラムの法をきびしく守って社会を正していくとする「イスラム原理主義」をかけたアフガニスタンの勢力。1996年にアフガニスタンの政権を担った。盗みにも手足を切断するきびしい罰を科したり、イスラムの法を守らない人を取りしまる宗教警察がおかれていた。



アフガニスタンの女性は差別されているの?

Q アフガニスタンで女性はどのような地位にありますか? アフガニスタンでは男性が女性を虐待していて、女性差別の象徴のように報道されていますけれど...?

A:(勝間さん) 私たちから見ればイスラムの女性の社会的地位は低いと思います。ただ、一方的にひどい女性差別のある国だというのはまちがっていると思います。タリバンの時代に女性はブルカ(頭からすっぽりかぶって姿をかくすような衣服)を着なければなりませんでした。今では義務ではなくなつ

たのに、まだ着ている人が大勢います。理由はさまざまですが、ブルカを着ること自体は大したことではないと思っているようです。それは、彼女たちが着たいか着たくないかにまかせるべきことです。

Q 完璧な社会はこういうもの”と、示せるものはないと思うんです。アメリカが完璧とも日本が完璧ともいえますよね。だからその国の人びと、アフガニスタンの女性が自分の社会をつくっていかなくてはなりません。ユニセフやほかの国際機関が協力して、できるだけ女性が社会に参加できる機会を提供しようとがんばっています。

(塙尾さん)(アフガニスタンやイスラムの社会では)実際は日常のさまざまな場面でお母さんが大きなパワーをもって子どもたちを守っています。子どもを世話し育てるには、お母さんの判断が一番大切ですから。

アメリカやほかの国をどう思っているの?

Q アフガニスタンの人びとはアメリカや日本に対してどんなふうに感じていますか?

A:(勝間さん) 旧ソ連がアフガニスタンを侵攻したこともあります。アメリカとロシアに対する反感はあります。日本に対してはいい感情をもっているんですよ。よく話題になるのが「ヒロシマ・ナガサキ」です。原爆を落とされて立ち直った国として尊敬されています。アフガニスタンの人びとはプライドがありますから、本当は援助をうけたくない、自分たちでできるものならやっていきたいという強い気持ちを感じます。

Q アメリカ軍が空爆の時に食糧を投下しましたが、どのように受けとめられたのでしょうか?

A:(勝間さん) 自分の国でみんなが食べているものだから喜んでもらえるだろうと思って届けても、必ずしも喜ばれるわけではありません。大事なのは現地の人の食生活を勉強して喜んでもらえるものを届けることです。

(塙尾さん) アメリカ軍が投下した食糧がタジキスタンに流れ

かつま やすし
勝間 靖さん

現在、ユニセフ駐日事務所のプログラム・コーディネーター。世界各地で開発協力をかかわる現地調査の仕事をしたあと、1998年からユニセフ。2001年12月までユニセフ・アフガニスタン事務所のモニタリング・評価担当官をつとめる。9月のテロ事件のあとは、パキスタン国内のユニセフの事務所から、アフガニスタンへの緊急支援活動にとりこんだ。



てきたことがあったのですが、中にあったチョコレートはすぐになくなってしまったけれど、だれもピーナッツバターには手をつけなかったらしい、という話を聞きましたよ。

報道されたことは本当のこと?

Q 各国のメディアの報道のしかたと、実際に現地を見て、感じたことを教えてください。

A:(塙尾さん) アメリカのCNNは、「今回の事件で私たちは被害者だから、中立の立場には立てない」といって、テロ事件の犯人とされたアルカイダの悪いところばかり報道しました。逆にカタールのアルジャジーラという放送局は空爆の被害を伝えました。それで報道の内容がメディアによってまったく違うことが世界中にわかってしまったのです。ひとつのメディアから情報を「それがすべて」と思ってしまうと他の意見が見えなくなってしまいます。

(勝間さん) いろいろなテレビの人と会って思ったのは、「映像がないとニュースにならない」ということでした。だからテロ事件直後はアフガニスタンについての報道はほとんどなかたですよね。タリバンがカメラを入れさせなかっただけで、本当はいろいろなことが起きていたのですが。

(塙尾さん) 「メディアは話題性を追求する」ということも感じました。タジキスタンで地震があり、一部の村が倒壊したことがありました。たまたまアフガン難民の取材に来ていたマスコミがいたので、「近くの地震の現場も見てほしい」って言つたのですが、「それには興味がありません」と言われてしまいました。人びとが苦しい状態にあるのはどちらも同じかもしれないのに。だからすべてを知ることはむずかしいですね。

子どもたちと学校

Q 難民キャンプで子どもたちはどのように過ごしていますか?

A:(塙尾さん) タジキスタンとアフガニスタンの国境にある難民キャンプでは、人びとはテントではなくて、泥づくりの壁にわらで屋根をふいた家に住んでいます。学校も同じよう

Profile

もくお ゆきえ
塙尾 雪絵さん

現在、ユニセフ・タジキスタン事務所の所長。青年海外協力隊やUNHCR(国連高等難民弁務官事務所)で仕事をしたあと、1995年からユニセフ。モンゴル、コソボ、マケドニア、モンテネグロでの勤務をへて、昨年9月から今の仕事に。アフガニスタンの危機のときには、国境をはさんでアフガニスタンへの支援の最前線にたった。

す。わらのマットを敷いて座り、机やイスはありません。男の子はあしを取ったり、女の子は家でお母さんのお手伝いをしたりしてはたらいています。

(勝間さん)詩をよむ文化があるので、詩を書いたり朗読したり暗唱したりして、みんなの前で発表していますね。男の子は干しレンガを作ったり、女の子は井戸へ水くみに行ったりもしています。



Q 教育制度が整えられると、どんなことが変わりますか? タリバンの時代には「ソ連兵が10人いて4人殺したら何人残るでしょう?」などの問題を出す教科書を使っていたと聞きましたが。

A: (勝間さん) ユニセフはアフガニスタンの教育の指導者とカリキュラムの改正や教科書の内容を変える活動をおこなっています。ユニセフが支援している学校ではもう新しい教科書が使われています。地雷が1つ地雷が2つなどと数えていた教科書も、りんごが1つ、りんごが2つ、と数えるようになります。タリバンの時は絵や写真が禁止されていたので、理科などが勉強にくかったのですが、今は絵を入れた教科書を使っています。

Q 国外に逃れた難民の子どもたちが教育を受けることは認められていますか?

A: (勝間さん) たとえば、パキスタンに難民として出てきて難民キャンプに入るためには、正式にはパキスタン政府による難民登録が必要です。ただ実際には登録されないままの人も多く、そうするとパキスタンの学校に行くことはできません。イラン側でもそれは同じです。イラン人はペルシャ語を話すので、ペルシャ語を話せる人はイランの学校でも学べるけれど、言葉ができないと学校には行けません。だからユニセフが中心となって、難民キャンプの中にアフガニスタンの子どものための学校をつくり、勉強できるようにしています。

Q これまで、現地の子どもとどんなことを話しましたか?

A: (李尾さん) 私はよく「大きくなったら何になりたい?」

インタビューを
終えて…

ネットワーカー記者の感想

「戦争が終わったら学校」というところへ行ってみたい」新聞に載っていた少年兵の、学校の存在を別世界のものとしてとらえていたようなこの言葉は、私に教育の重要性を認識させてくれた。そのこともあり、私は教育と子どもの生活について質問した。印象に残ったことのひとつは、数え方の話だった。カラシニコフや地雷などを使って、数を数えることを学ぶというのもとてもショックだった。単なる道具のように思わず、使う人は引き金をひくだけ、埋めるだけ、と殺人の意識そのものを失わせるようなことだと思った。質問できなかったことも多いが、この取材は私にとって有意義な時間となった。アフガニスタンの子どもたちが心から笑うことのできる日が早く来る事を願う。(大鳥由香子 16歳)

今回「記者」を通して、たくさんのことを知ることができたし、とても貴重な体験ができたと思います。まず自分は、アフガニスタンの状況についてあまり分かっていないと気付きました。まだまた勉強不足です。勝間さんと李尾さんはとても気さくで、強い意思を持つ人だと感じました。私もそんな芯を持つ人になればいいなと思います。また自分の意思を伝えることの大切さ、なにごとも自分で進んでとりくまなくてはだめだということを痛感しました。今地球には苦しんでいる子どもがたくさんいます。私はそのことが頭では分かっているのに、本当に理解できていません。「今自分にできることは何だろう」とあらためて考えさせられました。その実現に向かってこれからがんばっていきたいと思います。

(信末慶子 15歳)

と聞きます。学校を訪問するとみんな自分からノートを見せてくれます。「何の教科が一番好き?」とも聞きますね。

(勝間さん)「先生になりたい」と答える子が多いですね。

子どもたちをどう支えるか

Q 親をなくしたり、はなればなれになったりした子どもはどのように生かしていますか?

A: (勝間さん) アフガニスタンでは、おじさんやおばさん、おじいさんやおばあさんが一緒に大家族で住んでいて、とても家族のつながりが強いです。子どもの両親が死んでしまっても、おじいさんとおばあさんを中心とした、家族のだれかがその子どもの面倒をみています。親類や家族とまったく連絡の取れない子どもはあまり多くないですが、だれとも連絡の取れない子どもには里親のようなかたちで面倒をしてくれる人を探します。

Q 子どもに対しての心理的なケアとはどんなことですか?

A: (勝間さん) 内戦がつづいていたため、半分以上の子どもは、親類のだれかを殺されていて、とても心が傷ついています。ユニセフは現地の団体と協力して子どもたちがレクリエーションを楽しんだり、遊んだりできる環境づくりをしています。

おそろしい地雷

Q 地雷は子どもにどんな影響があるんですか?

A: (勝間さん) アフガニスタンに埋まっている地雷や不発弾はおよそ1000万個あります。サッカーをしていて、ボールが野原のはずれにとんでしまって。野原には地雷がどこに埋まっているのか分からないので、あぶなくてボールを取りに行けません。ガスがないので、食事をつくる燃料にまきを使いますが、まきを拾いに行って地雷を踏んでしまうこともあります。安全なところには、ここは大丈夫という印があるのですが、印がないところではいつ地雷にあうかわからない。恐れもあって精神的につらいし、自由に遊ぶこともできません。



アフガニスタンへ運ばれていく支援物資 ©UNICEF/SN-10-02-B-17A

Q 地雷を取りのぞくのに費用はどれくらいかかります?

A: (李尾さん) 地雷を取りのぞくための技術を持った人に来てもらうなどの活動資金を入れたら相当な金額です。

(勝間さん) ハイテクを使った地雷を除去する機械はお金がたくさんかかります。一番安いのは金属探知機でさがす方法ですが、作業する人にとって一番あぶない方法です。

Q 今は、ラジオなどで地雷のことを知らせているそうですね。

A: (勝間さん) 地雷があることは知っていても、いろいろな種類があることを知らない人もいます。おもちゃの形をした地雷もあるのです。地雷の形や種類も伝えることが大切です。

さいごに

Q これまで仕事をしてきて、一番印象に残っていることは何ですか?

A: (李尾さん) 私はモンゴルで2年半ほどはたられたことがあるのですが、遊牧民の人びとがぐらす広大な草原で、おじいさんとおばあさんと一緒に住んでいた10歳くらいの男の子に出会いました。10キロくらい行かななければなりの人もいないような場所で、大草原のまんなかで育つ子どももいる、こういうふうにくらしている人もいるんだなと、何だか感激しました。

(勝間さん) 私は2002年3月23日からアフガニスタンの子どもたちが堂々と学校に行けるようになったことに感激しましたね。



「私の行くところではなぜか戦争が起っちゃうんです。」笑いを誘う李尾さんの声には何ともいえない強さがありました。大きな危険があぶよ中での援助活動、現地の悲壮感などみじんも感じさせずどんな質問にも笑顔で答えくださった勝間さん。お二人ともとってもかっこよかったです。世界にはさまざまな問題があります。暗いニュースを目の前にして宗教や人種の違いを超えて理解し合うことは本当にできるのか、いつも思います。でも今回の取材を通して、私はやはり世界の、アフガニスタンの「明日」を見てみたい、信じたいと思いました。明日を生きるわたしたち子どもにもできることはたくさんあるのではないかと思います。ぜひこれからユニセフ子どもネットでさまざまな活動をしていきたいと思います。

(三島千明 16歳)



今回参加してくれたネットワーカー記者。アフガニスタンで「こんにちは」を意味するポーズで。前列左から、新田くん、勝間さん、李尾さん、大鳥さん、宇津木さん、中野くん、信末さん、三島さん

アフガニスタンのことは、とても遠い国のことだと思っていました。勝間さんの話を聞いて眼からうろこが落ちる感じがしました。蛇口をひねれば水がでること、スイッチを入れれば電気がつくこと、温かい食事、すべてのことに感謝の気持ちがわいてきました。アフガニスタンでは、4人にひとりが5歳になる前に死んでしまう現実、地雷が1000万個も埋まっている安心して歩けないこと、アフガニスタンのことを知れば知るほど援助が必要なことが分かりました。同じ人間としてぼくのできることは何か考えてみた(中野俊 12歳)

勝間さんと李尾さんは、戦争のある所にいた人じゃないみたいに優しくて強い人でした。アフガニスタンの子どもから見れば、日本は食べるものも何でもあるぜいたくな生活をしているんだなあとと思いました。クラスでも世界で苦しい生活をしている子どもたちのことを話し合ってみたいと思いました。何が問題で、どうすればいいのか考えて行動して、みんなが一緒に立ち上がり、わたしたちは世界を変えることができるのだということを教えてくれました。同じ星に生まれた世界中のともだちが安心してくらせるように夢を実現したいです。

(宇津木亜衣 9歳)

インタビューを終えて感じたことは、「ユニセフスタッフは笑顔が似合う」ということです。勝間さん、李尾さん、ほんとうにたくさんわら笑っていました。お二人とも、僕たちが暗くなってしまうような話題でも、明るく話してくれました。こうして、ユニセフハウスを実際に訪れて、ユニセフの方々とお話をさせていただいて、ユニセフ活動について理解が深まったと思います。また、他のネットワーカー記者のみなと知り合えて、みんなのやる気をもらい、これからも、じともかつどうもおもむか地元の活動を盛り上げようと思いました。(新田真之介 15歳)